



その意志で未来を動かす

## 甲南に「人」あり

学業だけにとどまらず、スポーツや文化・芸術、  
それぞれの分野で個性を磨き挑戦する学生たちを紹介します。  
その力強い意志から湧き上がるエネルギーの先には、  
豊かな未来が広がっています。

1

東京五輪 女子4×100mリレー走者

経営学部 経営学科 1年次  
体育会女子陸上競技部

青山 あおやま 華依 はなえ さん

大阪市出身。リレーと走り高跳びでインターハイ優勝経験のある両親のもとに生まれる。東京五輪・陸上女子4×100mリレー日本代表。将来性のある走りに加え、明るい笑顔とファッションセンスも魅力のアスリート。

2021年、日本の夏を彩った東京五輪。新型コロナウイルス感染拡大による緊急事態宣言下での開催には賛否両論があったものの、多くの人々に感動と希望を与えました。この世界が注目した大会に経営学部1年次の青山華依さんが、陸上女子4×100mリレーの第一走者として出場。惜しくも予選敗退しましたが、日本記録まであと0.05秒という好記録を残しました。青山さんにとって五輪は、どんな体験だったのか。勝負に懸けた思いと、その先に広がる夢について尋ねました。

世界の頂点で戦った自信を  
まぶしい笑顔と、しなやかな走りに変えて  
2024年のパリをめざす





第一走としてスタートを切る青山さん。

**楽しみながら夢中に走ってきたら、憧れの場所がそこにあった**

陸上を始めたのは、小学5年生のときです。父に連れられてクラブチームに体験入部したのがきっかけでした。中学時代は、国体で準決勝に進出し、全中陸上にも出場しましたが、特別に目立っていたわけではありません。陸上への姿勢が変わったのは、高校に入学してからです。強豪校の恵まれた環境の中、仲のいいチームメイトと切磋琢磨することが楽しくてトレーニングに励みました。その成果が記録にも表れ、高校2年生だった2019年に、日本選手権1000mで3位入賞、国体の女子少年A1000mでも優勝を収めることができました。

とはいえ、このときもまだ自分が五輪に出場できるとは思っていませんでした。はっきりと意識するようになったのは、大学に入学する直前の2021年3月、シレジア2021世界リレー選手権日本代表選考トライアルで優勝したときです。その2か月後、ポーランドで開かれたシレジア2021世界リレーに代表メンバーの第一走として出場し、4位入賞。この結果によって、女子4×1000mリレー種目が五輪出場権を獲得し、7月2日にリレーメンバーに内定したとの一報を受けました。小学5年生のときから楽しみながら一生懸命走り続けていたら、憧れの舞台に手が届いてしまったというのが正直な感想です。私でいいのかと不安に思いましたが、後悔しないよう全力を尽くそうと心に決めました。

**コロナ禍の開催で**

**SNSの批判に傷つくことも**

五輪開催までは、さまざまな悩みや葛藤がありました。1つは、世界リレー後に腰を傷めてしばらく走れなかったことです。6月の日本選手権にピークを合わせることでできず、決勝で最下位という情けない結果になってしまいました。「この成績で出場して大丈夫？」男子は日本選手権で選考されるのに、女子はどうして世界リレーで選ぶのか」などとSNSに書き込まれた数々の批判が目に入ると、気にしないでおうと思ってもやはり傷つきました。もちろん温かい応援のコメントもたくさんいただきましたが、自分自身が一番ふがいなく感じていただけに申し訳なく思いました。

2つめは、コロナ禍の開催に多くの否定的な意見が出されたことです。「辞退すべきだ」とアスリートの責任を問う声があることも知っていました。感染が拡大する中、国民のみなさんが不安に思うのは当然のことだと思います。でも、この私にできるのは、代表メンバーとしての責任を果たすことだけ。落ち込んだときは、高校時代や女子陸上競技部のチームメイトが「気にしないで。大丈夫！」と笑顔で励ましてくれたことが何よりの支えになりました。私の気持ちを察して女子陸上競技部顧問の伊東浩司先生や家族が、あえて何も言わず、いつもと変わらない自然体で接してくれたこともありがたかったです。今だから言えることですが、さまざまな葛藤や悩みをくぐり抜けたおかげで少し強くなれた気がします。

**カーブとバトンパスに集中し、プレッシャーを自信に変える**

ずっと1000mを中心に走ってきたため、リレーには不慣れな面がありました。「第一走の私がスタートでフライングしたら即失格になってしまう」「自分の走りがチームの流れをつくるから失敗できない」など、考え始めるとプレッシャーは大きくなるばかり…。そのような不安を自信に変えるため、伊東先生の指導のもと集中的にコーナリングの練習に取り組みました。短距離走の直線とは違い、カーブは、スピードを上げ過ぎると大回りになってしまいます。

また、内側のリレーラインを越えると失格になるため、微妙なコントロールをマスターする必要があります。勝負の鍵を握るスムーズなバトンワークも所属する女子陸上競技部のチームメイトに協力してもらいながら精度を高めるとともに、代表メンバーで関西在住の第三走者、齋藤愛美選手とも時間を合わせて練習を重ねました。もちろん、五輪に出場するからといって大学の授業を疎かにできません。何より学業を最優先に自宅でオンライン授業を受けてから、六甲アイランドにある陸上競技場に通う日々。勉強と練習の両立は大変でしたが、経営学部の学びは面白く、オンラインであれ友人たちと交流できて気分転換にもなりました。

**日本記録に0.05秒届かず…。走り切った自信と悔しさをバネに**

選手村に入ったのは、予選の前々日。一歩足を踏み入れた瞬間、「テレビでしか見たことのない



五輪後、取材依頼が増えてきたそう。自分から話しかけるのが苦手という少しシャイな一面も。

選手村に自分がいる！」という当たり前のことに不思議な感動を覚えました。それ以上に圧倒されたのは、8月5日、予選当日の国立競技場の雰囲気です。さまざまな陸上競技の一流アスリートが一堂に会する光景は、五輪ならではの、何とも言えない緊張感が漂う中、海外の選手たちは、ダンスをしながら入場したり、大声でおしゃべりしたりとまるでお祭りみたいにして楽しそうでした。そんな彼女たちが本番になると一瞬にして真剣な表情に変わる様子にも驚かされました。ぎりぎりまでリラックスし、一気に集中を高めて最高のパフォーマンスを見せる姿勢に同じアスリートとして刺激を受け、深く印象に残っています。

そして午前10時、女子4×1000mリレー予選が始まりました。私たち日本代表メンバーは、予選1組に出場。スタート位置に立ちトラックを見つめて思ったのは、これまでの練習と他のメンバーを信じて「自分の走りをしよう」ということだけです。残念ながら目標に掲げていた日本記録に0.05秒届かない43秒44の7着で予選敗退という結果になりましたが、大舞台で全力を尽くして走り切ったことは、大きな自信になりました。

競技場を後にするとき、コロナ禍の中、開催に尽力してくださった関係者の方々、応援してくださった方々への感謝で胸がいっぱいになったことも覚えています。この経験と予選敗退の悔しさを、必ず次に生かしたいと心から思いました。

**甲南という大好きな場所から次のパリをめざす**

五輪後の9月には、日本インカレに出場しま

した。個人では、1000mが3位、2000mが6位、部としては4×1000mリレーで3位の成績を収めました。日本代表としてともに戦ったリレーメンバーも、これからはライバル。せっかく打ち解けた仲間と競い合うことには抵抗がありますが、今年は、世界レベルの大きな大会が目白押しです。ユニバーシアード成都2021（2022年6月開催予定）、オレゴン2022（世界陸上競技選手権大会、杭州2022アジア競技大会など重要な試合に向けて気持ちを切り替えて勝利を狙います。

直近の目標は、6月の日本選手権で確実に上位を取ること。のために筋肉量を増やすトレーニングに力を入れながら、1000mで11秒2を切ることを課題に走り込んでいくところ。練習中心の毎日ですが、陸上競技部のチームメイトや学部の友人たちのおしゃべりが最高の息抜きです。例えば、甲南大学との出会いは、中学3年生のときでした。国体で知り合った先輩に「クラブの雰囲気も良く、練習環境も最高だよ」と教えてもらって以来、憧れの大学になりました。改めて今、甲南を選んでよかったと思っています。この恵まれた環境のもと、大好きなチームメイトとメリハリのある練習を重ね、2024年のパリをめざします。





## 「プロサッカー選手になりたい」誰も信じなかった目標を 実現しさらなる夢のスタートラインに立つ

振り返ると経営学部の学びも充実していました。サッカー後のセカンドキャリアとしてスポーツビジネスに携わることを考えているため、将来に役立つ知識が身につく、視野も広がったと感じています。話題のビジネス書や自己研鑽につながる書籍を幅広く読むとともに、小学校のころから毎日書き続け

**紙一重を極める選手になり、  
3つの夢を実現したい**

振返ると経営学部の学びも充実していました。サッカー後のセカンドキャリアとしてスポーツビジネスに携わることを考えているため、将来に役立つ知識が身につく、視野も広がったと感じています。話題のビジネス書や自己研鑽につながる書籍を幅広く読むとともに、小学校のころから毎日書き続け

ば、プロサッカーチームからオフアが来ると考えていたからです。落ち着いて臨んだ結果、ワンゴール・ワンアシストを決めるなど存在感を示すことができました。大会後、監督に呼び出され、「アビスパ福岡からキャンプの誘いが来ているが、どうだ？」と聞かされたときは、うれしさもありましたが、スタートラインに立てた安堵のほうが大きかったのを覚えています。

その後、1月下旬からアビスパ福岡のキャンプに参加。最初こそとまどいましたが、すぐに気持ちを切り替えて監督や先輩に積極的に質問し、コミュニケーションを深めることに。少しずつチームと打ち解け、試合中にはリラックスして的確な指示を出すなど、デイフェンスに求められるコーチング力も発揮することができました。

実は、この「質問をする」という姿勢も、サッカー部で養ったものです。練習試合のたびに質問を重ね、柳川監督の要求と自分のプレーを擦り合わせて理想を体現できるように努力してきました。3月には、アビスパ福岡への加入が内定。将来を左右するキャンプという場で、一つひとつのプレーだけでなく考える力やコミュニケーション力など、こだわり続けてきた「総合力」をアピールできて満足しています。

### 2

J1アビスパ福岡加入内定

経営学部 経営学科 4年次  
体育会サッカー部

**井上 聖也** さん

釣り、読書、映画・美術・オーケストラ鑑賞、一人旅など、関心が幅広く実に多趣味。最近、最も気になるのはミュージカルらしい。

187cmの長身を生かしたダイナミックなプレーでサッカー部の躍進と1部リーグ定着に貢献したセンターバック(CB)・井上聖也さん。そのプレーは高く評価され、J1リーグに所属するプロサッカーチーム「アビスパ福岡」への加入が内定しています。本学からは、ファジアーノ岡山でプレーする木村太哉さん(R3マネージャー)に続き、2年連続、J1リーグ誕生の快挙となります。ずっと無名の選手でした」と語る井上さんの歩みと未来について聞きました。

### 柳川監督との出会いが、 人生最大の転機に

4人兄弟の末っ子で物心ついたときには、ボールを追いかけていました。ずっとプロになりたいと思っていました。その夢を口にすると「本気か?」「そんなの無理に決まっている」と笑われてばかり。早くからサッカーのエリートでも天才タイプでもないと感じていたため、地道に努力を続ける継続力や他人が何と言おうと自分を信じるマインドが育まれたのかもしれない。小学校のころから常に尊敬できる先生方と出会えたことも幸運でした。いつも静かに見守り、「自分で考えなさい」と熟考する大切さを教えてくれた両親にも感謝しています。

しかし、最大の転機の一つになったのは、甲南大学体育会サッカー部で柳川雅樹監督と出会ったことです。J1リーグになるために何をすべきかを具体的に教えてくださり、漠然とした夢が「必ずプロになる」という具体的な目標に変わっただけでなく、「プロになった後、何をするか」まで考えられるようになりました。監督の指導でサッカー部のモチベーションや技術も向上し、2年次で関西1部リーグ昇格、3年次には大学サッカーの全国大会「atarimaeni CUP」で関西勢唯一のベスト8入りを果たし、最終学年では見事に1部残留を達成して卒業を迎えることができました。

### アビスパ福岡のキャンプで こだわり続けた「総合力」をアピール

コロナ禍の2021年1月に開催された「#atarimaeni CUP」は、僕自身にとっても特別な大会でした。この大舞台で良いプレーができていたサッカーノートを通じて自分自身を見つけてきたことも、感情に流されず冷静に課題をクリアする力になりました。サッカー選手として二人の間人として大きく成長できた4年間だったと思います。

J1リーグ入りは、通過点であって到達点ではありません。加入内定の記者会見でもお話ししましたが、僕には3つの夢があります。一つは、日本代表としてワールドカップベスト4に貢献すること。二つめは、42歳になるまで20年間プロを続けること。三つめは、いつか柳川監督が率いるであろうJ1リーグのチームでプレーすることです。最後の夢を聞いた監督は驚いていましたが、僕はいたって真剣です。いつの日か尊敬する監督のもとで勝利に貢献できたら、こんなにうれしいことはありません。

これらの夢に向けた僕の課題は、「紙一重を極められる選手」になること。球際の競り合いもポジショニングも、サッカーは常に「紙一重」の戦いです。ぎりぎりの厳しい勝負を制する判断力と瞬発力に磨きをかけアビスパ福岡に貢献するとともに全国に名前を知られるJ1リーガーとして活躍できるように努力します。そして誰もが認める結果を出し、柳川監督をはじめ、これまでお世話になった恩師、先輩、友人、そして家族に恩返ししたいと思います。



加入内定にともなう記者会見を実施。ユニフォームに袖を通した井上さんと柳川監督。自身もJ1でプレーした元J1リーガーだ。

※全国大会「atarimaeni CUP サッカーができる当たり前に、ありがとう!」は、新型コロナウイルス感染症の影響により中止となった「総理大臣杯全日本大学サッカートーナメント」と「全日本大学サッカー選手権大会(インカレ)」の両大会の出場資格を合わせた2020年度のみの特例大会。





練習成果を披露する内藤さん(左から2人目)。部員が一人の部活にとっては、貴重な機会だ。

初めてのステージ、神戸学院大学での定期演奏会で得た充実感と達成感

最初は、現役部員ゼロという驚きの事実を知って入部をとまどいましたが、そのうち「いや、待てよ」と考え直したのです。現役部員は自分一人しかない。「逆に一人だからこそ、より自由にチャレンジができるじゃないか」と。そして卒業生の方々が、さっそく体験練習の場を設けてくださいました。温かく歓迎していただき、協力してくださっているプロのボイストレーナーの方からも指導を受けて、入部へと心が決まりました。

今でも印象に残っているのは、入部式で大先輩から「自分のやりたいことをやればいいよ」と声をかけていただいたこと。そのおかげか、伝統を

大先輩のことは胸に合唱への入り口を広げてめざすは部員10人

そうして始まった、たった一人の部員としての活動。2021年の夏はボイストレーナーの方とマンツーマンで、発声や表現の技術を磨く中、「バンドラ」さんの定期演奏会への出演が決まった9月からは、神戸学院大学に通って合同練習。伴奏の音源をもらって自宅でも毎日練習。英語やドイツ語のほかフランス語の曲もあつて難しかったです。自分の技術が上達していくのが実感でき、どんどん楽しくなっていたのを覚えています。定期演奏会当日はグリークラブの卒業生の方々も駆けつけてくださり、「がんばれよ」と激励してくださいました。卒業生のみなさんは、グリークラブを誇りに思い、本当に愛していらっしゃるのだなということが事あるごとに伝わってきます。また、「バンドラ」の方々の関係も深まり、「次の定期演奏会も、ぜひ一緒に」と言っていただけでした。あちらのメンバーには香港からの留学生もいて、思いがけず国際交流もできています。

絶やしてはいけないという使命感はあるものの、気負いすぎることなく活動できています。合唱だけでなく、もう一つ鉄道という趣味があるのでメリハリがつけられているのかもしれない。授業、アルバイト、鉄道旅行、そしてグリークラブ。4つが上手にかみ合っていて、とても充実した大学生活になつていると感じています。今後の目標は、卒業するまでに部員を10人に増やすことです。みんなで心を合わせ、声を合わせて歌うことで一体感が得られる。その歌で聴衆の心も動かせる、そんな合唱の魅力を一人でも多くの人に知ってほしいと願っています。さらに最近、「グリークラブにかかわる動機は、歌だけでなく、もいいのではないかと」も考えるようになりました。たとえば、映像制作に長けた友人が、クラブのPR動画制作を手伝ってくれてもいい。グリークラブの活動を中心に、いろいろな可能性が広がられるはず。伝統を守りつつも、新しいトピラを開くエンターテイナーをめざして、楽しく表現活動をしていきたいと考えています。



3

グリークラブ

文学部 社会学科 1年次  
内藤 雄基

合唱大好き小学生が、中学校では吹奏楽部で県大会へ出場。高校時代の放送部では全国大会出場を果たす。これらの経験が生かされるとグリークラブへ入部。もう一つの趣味である鉄道旅行での目標は、日本の鉄道路線全線完乗だそう。

1951(昭和26)年に発足し、2021(令和3)年に創部70周年を迎えたグリークラブ。しかし、奇しくもその記念すべき年に、現役部員ゼロという危機が訪れました。合唱を愛する卒業生たちが部の存続を守るうとする中、一人の新入生がクラブに興味を示し、入部を決めました。現状を知らずに飛び込み、卒業生らのサポートを受けながらたった一人の現役部員として活動に励む、内藤さんにお話を聞きました。

議でした。その後やはり気になって、SNSで見つけたグリークラブのツイッターアカウントに興味をもっているのですが」とDM(ダイレクトメッセージ)を送ってみたのです。そして、早速いただいた返信。そこには「今、部員はいないので」と書かれていました。

後からわかったことですが、グリークラブは2021年3月ごろに部員がゼロになっていました。SNSのアカウントを運営されていたのは卒業生の方です。「もし、アカウントが放置されていたら」「もし、自分が勇気を出していなければ」と、一通のDMがつかないでくれたご縁に感謝せずにはいられません。

伝統の継承者 であり、合唱の新しい可能性を開くエンターテイナーでもありたい

合唱から吹奏楽、アナウンスへと興味を広げ、また原点に帰ってきた

12月5日、神戸学院大学の混声合唱団「バンドラ」さんの定期演奏会にゲスト出演させていただきました。グリークラブに入り、唯一の現役部員として活動が続けてきて最初の晴れ舞台。「バンドラ」のみなさんとともに練習を重ねた9曲を披露し、改めて「合唱っていいな」と感じました。

自分では記憶にないのですが、幼いころから歌うことが好きな子どもだったそうです。それならばと、母が地域の合唱クラブに参加させてくれました。小学校1年から6年まで習い事のような感覚で通っていたことを覚えています。中学校では合唱部がなかったため、吹奏楽部へ。楽器は初心者ながらもチューバを担当し、2年生の時には神戸市の地区コンクールで金賞を獲得しました。

高校にも吹奏楽部があったのですが、当時はアナウンスに興味があり、放送部に入りました。自分で取材してアナウンス原稿から作成したり、ドキュメンタリー番組を制作したりと有意義な活動ができました。「音楽」や「声」で表現することを通じてきたので、甲南に進学が決まった際にグリークラブがあると知り、体験入部してみたいと考えていました。

現状を知らずに送ったDMからすべてが始まった

ところが、クラブ勧誘の場にグリークラブは見当たりにません。あるはずなのになぜだろう、と不思議







摂津祭での一コマ。左が女形を演じる成田さん。初舞台とは思えない落ち着きと仕上がりがだ。

## 70年の歴史が再びよみがえる歌舞伎文楽研究部、 復活劇の立役者「歌舞伎はカッコイイ」

歌舞伎文楽研究部は関西で唯一、歌舞伎を実演する部活ですが、部員がゼロとなり2年間休部となっていました。約70年の歴史をもつこの老舗クラブに入学したのが成田さんです。部員は一人ですが、周囲のサポートを得て摂津祭では公演を実現。2021年は活発な文化活動が認められ、理事長杯も受賞しました。まったくの初心者である成田さんがなぜ入部を決め、どんな活動をしているのか、歌舞伎の面白さについても語ってくれました。



4

歌舞伎文楽研究部

文学部 日本語日本文学科 2年次

成田 亮平 さん

未経験でも歌舞伎を楽しく演じられたことで、どんなことも柔軟に楽しめる素養があると気づいた。「将来どんな仕事に就いたとしても、楽しさを見つけれられるのではないか」と語る。

### 七五調のセリフが心地よく 練習は想像以上の楽しさ

歌舞伎に関心をもったのは、高校時代に読んだ小説『カフキブ』がきっかけです。高校生が歌舞伎部をつくる物語で楽しく読みましたが、観劇までには至りませんでした。ところが入学した年の10月、新入生歓迎会で卒業生の方が勧誘活動をしており、そこで歌舞伎文楽研究部の存在を知りました。関西唯一の歌舞伎を実演するクラブで、現在は部員がゼロ。小説と境遇が似ていることに驚き、「入部すれば小説みたいでかっこいいかも」と考えました。入部の不安はありませんでした。高校で所属していた新聞部も最初は先輩一人の部で徐々に部員も増えたため、「いつか増えるだろう」と楽観的な気分でした。何より「小説と同じように歌舞伎ができる、またとないチャンスだ」と心が動きました。

現在は週に1回、師匠から90分程度指導していただいています。最初は対面で舞踊を教えてください、コロナ禍でオンライン活動になってから『外郎売』の口頭を練習し、6月からは摂津祭に向けた演目の練習に入りました。セリフは知らないことばかりで、言い回しやイントネーションが独特です。一つずつ師匠から指導を受け、動画を見ながら自主練習も重ねています。練習は大変ですが、とにかく楽しいです。七五調のセリフはリズムが心地よく、お腹から声を出すのはカラオケで歌うように爽快です。立ち回りも師匠から教えていただくのですが、二つくりアするともう一段レベルを上げて指導をしていただけるので、達成感も得られます。練習が楽しいのは師匠のおかげです。

### 他の部からの支援など 周囲の優しさが原動力に

入部から10か月後、2021年の摂津祭では『三人吉三巴白波』大川端庚申塚の場を上演しました。吉三という同じ名前をもつ三人の盗賊の出会いの場面を描いたもので、小説『カフキブ』でも主人公が最初に選んだ演目です。小説と同じ演目を演じられるというだけでテンションが上がりました。

メイクや衣裳は師匠が手配してくださり、道具やかつらは以前から部でお世話になっている企業の方にサポートしていただきました。70年の歴史を実感し、最高の環境で上演させてもらえる幸せを感じました。

もちろん私一人では上演できません。登場人物の4人は、私の友人と卒業生の方、能楽研究部の部長が協力してくれました。書類作成をサポートしてくれた学生部の職員さん、文化会をまとめる文化会常任委員会にも大変お世話になりました。公演前には、他の部の面識のないメンバーから「二人で大丈夫？」とSNSで連絡が入りました。うれしくて何度泣きそうになったことか。みなさんの温かさを感じ、甲南でよかったと実感しました。

初の舞台だったため準備に忙殺され、緊張する余裕もなく本番が始まりました。公演を見た友人からは「女形をやっていた感じがよかった」「声がよく通っていた」と褒めてもらいました。しかし、「話の内容が面白かった」といった感想はなかったため、歌舞伎の面白さが伝わり切れていないと感じました。歌舞伎を楽しむためには多少の予備知識が必要になるため、今後の課題だと考えています。

### 全国大会開催も目標に これからも続けていきたい

歌舞伎文楽研究部に入部後、卒業生の方をはじめ多くの方々に助けってもらい、優しさをいただきました。高校までにはなかった大きな成長です。良い出会いを経験できたのは、人と人の距離が近い甲南だからこそだと思います。

一方、他の部とかかわりをもたせてもらい、部員たちの仲の良さを見ると、寂しさも感じます。一人で活動する大変さは周囲のサポートで乗り越えられますが、仲間がいない辛さは越えがたいです。とはいえ歌舞伎は楽しくてカッコイイので、今後もしっかり続けていきたいと思っています。

目標は2つあります。自分の代では無理ですが、海外公演を実現すること。もう一つは、大学の枠を超えて切磋琢磨できるような全国大会を開催することです。そうやって実績をつければ、新入部員も入ってくれるのではないかと考えています。部員が増えれば、上演できる演目も広がると期待しています。日常では自分を「カッコイイ」と思える機会が少ないと思いますが、歌舞伎はそう感じられる非日常です。歌舞伎文楽研究部で新しい自分を発見できると思っています。

